



第 3 号

発行所
鎌倉市材木座6-17-19
光明寺中神奈川教務所内
浄土宗神奈川教区青年会

発行人
柴田 哲彦
編集者
野白 石 中石 川 省謙 到 道祐 覚

神奈川青生会 9月15・16日 於 光明寺
善導大師1300年遠忌宿泊研修会開催される

周知のごとく、来る昭和五十五年には善導大師一三〇〇年の遠忌を迎える。浄土宗内では、これに因んだ多種の事業が企

画されるであろう。我々浄土宗侶にとって、この機会をとらえ、あらためて善導大師とのおしえにふれなおすことは、極めて意義あ



るものといわねばならぬ。

浄土宗の現代化とそれにともなう現代に相応しい布教の必要性が叫ばれて久しいが、両者ともが二祖三代教学の正しい理解を無視しては成り立たない。特に宗祖法然上人が——偏に善導に依る——と称された善導大師の基礎的な理解ほど重要なことはない。

善導大師一三〇〇年遠忌によせて

会長 柴田 哲彦

今回の研修会もこの点に留意して善導大師を中心とした、教学・時代・念仏布教、と多面にかたる総合的な研修会をということ、一宗を代表される宗学者服部英淳先生に「善導大師の教義と実践」、仏教学専攻の宮林昭彦先生に「善導大師の時代背景と玄中寺の現況について」、宗学伝導学の立場から金子真補先生に「教化活動における善導大師」といったテーマのもとに講義をお願いした。

(要旨本号中に掲載)



宮林先生

善導大師一三〇〇年遠忌にもっともふさわしい記念の事業であると確信する。今回のこの神奈川浄青主催による善導大師研修会が、そのような記念事業完成の一助となることを念じてやまぬものである。



服部先生

際して、国流罪に宗祖の遺蹟とは念仏の聲がそまさに



金子先生



真の遺蹟であると語られたという。

宗祖のこの言葉を味わいながら遠忌記念事業のありかたを考えると、と

かく遠忌事業というものは、堂塔の建立・記念法要、など固定化されてしまいう傾向にあるが、これらのみが事業と思ってはならない。我々浄青僧にとつては、善導大師によって説示された本願称名の念仏を正確に承けとり、さらに一人でも多くの同行者をつくってゆくこと、これこそ、

浄土宗青年会はサロンの集りであってではない。

自分の生い立ちの環境に影響なく宗教者の道をえらぶこと（現代における出家）は最も強い勇気を必要とすることである。この自覚のもとに僧侶になった人であっても「僧侶とはなにか」「また何をするべき存在であるのか」を自問自答し、人間的な苦悩と不安に苛まれるのが青年期であらう。いやこの苦悩は宗教者としては生涯もち続けるものであらうが青年期の純粋さが生涯を決定づけていくのである。この話し合いの

若い教化者諸師へ

前知恩院副執事長 白幡憲佑
久保山光明寺貫主

苦悩と不安をさらけ出して語り合う仲間、これが青年会である。そこにこそ化他の目標 生れてくる。化他とは何か。それは時代の苦悩との対決である。現代社会の生み出す苦悩をとにもわかれ合い、その深みを

さぐりあてる人間的な努力を現在の僧侶はおこなっているのだらうか。

いたずらに僧侶社会に閉じこめることなく、同世代の青年達に、「念佛は必要か」を問う勇気と責務を持っていただきたい。それには浄青の組織を母体として各寺に一般青年を対象とした浄土宗青年会を結成することである。

二十二年前に浄青を再発足させた頃を想起し、結果を次代に委ねる事の出来なかった慙愧のうちに筆をすくめた次第である。御発展を祈念すること切である。

花まつり奉仕活動 金沢母子寮を訪問

四月八日午後一時より化他活動の一環として、釈迦生誕の喜びを多数の人々とわかちあおうと、会員持寄りによる海苔、缶詰、カルピス、正油等のプレゼントをもって、金沢区朝比奈町にある金沢母子寮において花御堂をかざり、誕生佛を囲んで花まつりの会を行なった。

午前十一時光明寺へ集合。会長以下十五名、物品の整理と打合せを行い、車にて出発した。

この母子寮は人員は母親十六名子供三十九名、職員四名である。早速甘茶をわかし花御堂を飾る。定刻一時小杉副会長の開会のことばで仏教讃歌のレコードがかかり、導師入堂着座。全員合掌起立。塚田、戸田両師の介添えで子供達代表による献香、献華が終わると、先に練習した「月かげの歌」「仏の子ども」を全員で歌う。みんな緊張の面もち。大声で誓いのことばをと覚えてか

ら着席し、導師のあいさつを真剣に聞いた。セレモニーが終わると、アトラクションに入った。

野中省道先生のおはなし、驚見、里見先生の紙芝居、間を司会が歌・手品等でつないでいく。うれしそう顔が並び、小さい子供がわれわれの間をとり回る。それらを見ている母親達も楽しそうである。

(石川成弘記)

母子寮 一母よりの手紙

四月八日は思いがけない花祭りの催し、ありがとうございました。

子供達は勿論のこと、田舎生れの私にとっても、生まれて初めて見たり聞いたりする事ばかりで、楽しい数時間を過ぎて頂きました。三才になる私の子も、一人前に甘茶をかけて何かお願いした様です。

皆様の真心のお陰で、皆んな明るく、又明日に向かって生活していく氣力が生まれてきた様に思います。その上の心づくしに重ねて深く感謝して居ります。

又いつか逢える日が来ることを楽しみにして居ります。

お礼の手紙を寮長様他数名の方より頂きました。



— 関プロ大会報告 —

テーマ
“光明を求めて”のもと茨城へ結集
総会・新役員決まる

第六回関東ブロック浄青研修会及び総会が、去る六月十七日十八日にわたり、茨城県取手市・弘経寺を会場として開催された。

六月としては大変暑い中を会員の出足は好調で、関東一円より一〇七名の各県会員が結集し、定刻一時三〇分より総会が開かれた。

議事は前年度事業報告、決算報告に始まりいずれも承認、続いて役員改選に移り、左の役員の推薦候補者が紹介され、満場一致で決定した。

理事長 埼玉 吉水大智
副理事長 山梨 日下部裕文
“ 茨城 長谷川光洋
事務局長 埼玉 石田正信



総会・新役員決まる

会 計 埼玉 川端清光
監 査 群馬 茂木孝順
“ 神奈川 白石謙祐

次に新執行部による事業計画案が提出され、新事業として、寺族児童を対象とした臨海（林間）研修会・出版事業—機関紙・伝導パンフレットの発行—等が盛り込まれた。続いて予算案の審議がされ、付帯事項として、来年度より個人会費が四〇〇円に値上げになることも含め全て承認された。

最後に緊急議題として、宮城県沖地震による被害者救援カンパが提案され、又今日の念佛行進による市民からの浄財寄捨も全てこれに当てる事を決議し、総会を終了した。

研修会は三時より念佛行進にて始まった。コースは会場から約1kmはなれた取手駅を一巡して、途中二ヶ所で街頭伝導を行ない、合わせて地震被害者の救援をうったえた。約一時間にとわたり、百人からの大行進に取手市民の関心を高めた。

会場帰着後直ちに、大正大学講師、土屋光道先生の「佛願に込めて」という演題のもと講演に移り、我々は佛に願いをかけられているのであり、

その願いに応えるべく自覚を持たなくてはならないと、熱演の中にも、軽妙なわかりやすいお話に、深く感ずるものがあつた。

夜は懇親会を兼ねて、各教区の情報交換がなされ、和気あいあいのうち第一日は終了した。

第二日は早朝勤行のあと、九時から、京都芸術大学学長 梅原 猛先生の「法然上人について思うこと」という演題のもと、先生の尊敬する法然上人像について、及び日本人の精神構造の中に佛教がどの様に深くとけ込み、日本人の思想を作り上げていくかという、興味深く、又明日から

〈新書紹介〉

法然浄土教の諸問題

高橋 弘 次著

本書の著者は善導・法然の人間観を中心として浄土宗を研究されている学者である。本書は法然浄土教の人間観・仏身観・信仰論と浄土宗の諸問題という四部三十二節四十八項で構成されている。内容は浄土宗学における人間観の究明と、さらにその人間と仏との関係について永年の学的成果を背景に考究し論じているもので、研究者・布教家は勿論のこと、一般人にも読みやすい好書である。A5版二九六頁 山喜房刊 定価 六、〇〇〇円

の浄青の指針となるお話を伺い、第六回関プロ大会は成功裡に閉会した。今回の大会には、当教区からも例年に増して参加者が多く、次の十四名の会員が出席した。

戸田信定 柴田哲彦 日比野隆道
北邨賢雄 吉岡了泰 篠田知並
森本祐東 森 泰彦 都築融光
石川成弘 香川隆敬 塚田勝晃
高島善隆 白石謙祐 (白石記)

嵯峨 清涼寺にて

第八回全浄中研開かる

五十三年度全浄青中央研修会は京都の嵯峨清涼寺を会場として、八月二十九三十日の両日にわたって開催された。

会場となった清涼寺は、三国伝来生身の釈迦像をまつる寺として、古来より庶民信仰の霊地として有名で、さらに法然上人が二十四才の青年時代、求法のため南都に諸師を歴訪の折、ことの成就を祈請、七日間参籠された故地として忘れえぬところである。

今回の日程は開会に先きだち青雲寮建設資金贈呈式、さらに塚本善隆先生の「善導大師観」・別時、二日目の念佛行脚と次第し、全国から百名の参加を得、有意義な研修会であった。当教区からは会長が参加。

善導大師一、三〇〇年遠忌研修会

記念講演要旨

善導大師の教義と実践

大正大学名誉教授
文学博士 服部 英淳
浄土宗 勸学

【第一日】

善導大師の教義は、宗学の上では「導空二祖一轍」「二祖対面」として伝えられ、両者の教義は完全に一致するものとする。所が、最近「偏依」を「総依」「分依」等と理解する説が見られ、それが昂じて善導教義への誤解が行なわれている。例えば三心の中の「回向発願心」の解釈を見ても、「自力回向」になっていて、善導大師のいう「他力回向」になっていない。「回向」の基本的な解釈を見直す必要がある。

回向発願心積の「所修善根皆悉回向」の所、修善根とは、自力の善根ではなく、あくまでも他力に裏付けられた善根である。「往生論」には「本願力によるが故に」と説かれ、我々が本願力に支えられて、修せしめられたものであることを正しく知らなければならぬ。

大乘仏教は菩薩行を説く教えである。菩薩の修業の階位は「華嚴経」に

よると、①十信②十住③十行④十回向⑤十地の五十位を説き、「要略本業経」では五十二位ある。この中で肉身の菩薩が修することの出来るのは④までである。これは「父母生身」であり、「分段生死」である。⑤は肉身を捨てた菩薩の「変易生死」の段階で「法性生身」をめざす「意生身」である。⑤の第十地の行を完成すれば「法性法身」を得て、成仏するのである。しかし、この菩薩とは我々凡夫のことではなく、これらの行を実践される聖者のことである。これらの聖者は第七方便波羅密による、利他・善巧方便廻向を実践しなければ成仏は出来ない。従って我々凡夫は、この菩薩の利他（他は凡夫を指す）行に回向され、導かれて往生出来るのである。つまり、回向とは本質的に他力でなければならぬ。このことは世親の「往生論」に説く「五念門」の最後が廻向門であることに共通し、善導大師も法然上人もこれを承け伝え、伝法にも口伝されている。以上のように、善導大師の思想が、大乘仏教思想の土台の上にすえられていることを見究め、正しく理解する必要がある。

【第二日】

「聴講者より「往生と成仏の違い」「信機とは無仏性と信ずること」か、という質問をめぐって、講演された。」
第一の質問は昨日の説に譲り、主として浄土宗の「仏性論」について述べる。

「信機」を「無仏性」とする考え方がありとすれば大変な誤りである。法然上人は「選択集」の初めに善導大師の師である、道綽禪師の「安樂集」を引き、「一切衆生悉く仏性あり」と述べている。道綽禪師はもと涅槃宗（仏性宗）の人で、仏性論から出発している。十三才の時、北周武帝の破仏と大洪水を目撃し、その中で出家された。法然上人は「選択集」で中国浄土教に三流あることを述べ、その第三に道綽善導流を述べている。この中に更に（一）菩提流支、慧寵、道場、曇鸞、大海、法上の六大徳を道綽の「安樂集」により、また（二）菩提流支、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康の六祖を唐宋両「高僧伝」によって記している。今の（一）は道綽の学系を示すものであり、（二）は法然上人自身がまとめられたものである。（一）の系列に出る人師は、何れも中国の南道、北道の地論宗に属する学者である。「観無量寿経」や「起信論」はこのグループの中に成立したともいわれる。道綽が教えを受けたと思われる法上は、「楞伽経」の「如来藏自性清浄心」を説き、また「涅槃経」の「仏性」を説く。しかも「十地経論」のもとである「華嚴経」には「総該万有互有一心」の説がある。地論宗ではこの「自性清浄心」「仏性」「一心」は全て同じものであるとする。道綽はこれの中で学び、「涅槃経」を二十四回も講じている。經典には成仏の可能性（仏性）を説くにもかかわらず、現実はそのとおりにもかけ離れている。この矛盾を解決してくれたのが曇鸞の本願念仏の教えである。善導大師が師の道綽からこの仏性の説と本願念仏の教えを継承したことは言うまでもない。法然上人が（一）と（二）の二つの系列を示したのは以上の意味からである。大乘仏教は空・無我を追究した教えといわれるが、それは逆で、竜樹世親の追究したのは「我」（永遠の生命）とは何かであった。それは一心、阿羅耶識仏性である。この仏性を正しく知り、それをけがしている現実を反省することが「機」を信ずることになる。半金色の善導像は、仏性を内蔵する人間の本来の姿を示したものである。

（文責 石川・金子）



善導大師の時代背景と

玄中寺の現況について

大正大学教授 宮林昭彦

善導大師が誕生されたのは、隋の三代煬帝の時代である。煬帝は世界最大の運河をつくり、洛陽や長安の都をはじめ大運河沿岸に離宮を建てて豪遊するといった派手ずきの王であった。また盛んに外国征伐の軍を動かし、朝鮮半島にまで軍を派遣したが成功しなかった。戦争、暴動、国民の不満、天子の殺害等の血なまぐさい時代を経て、漸く唐の国の天下統一ができた。

唐の二代太宗とつづく高宗の時代は、豊年はつづき天下太平を謳歌した全盛のときであった。中国古来の宗教と共に仏教の黄金時代を迎えたのもこの時代である。祇教（ゾロアスター）、景教（キリスト）なども入り、旧来のものだけでなく、宗教的にも新しい気運が起り、文化の面でも爛熟期を迎えている。玄奘が帰国して、千三百巻余の經典新訳の大事業が進められたのもこの頃である。このように豊かで、しかも恵まれた時代でありながら、一方には隋の南獄慧思や、信行、道綽などによって説かれてくる末法思想、即ち危機意識が底流にあった。

このような状況下にあつて、善導

大師は「目を挙げて女人を見ず」という、非常にきびしい「持戒」の生活を送られた。これは善導大師の深い人間性（凡夫）の反省に基づく、宗教的な実践であることは言うまでもない。

法然上人が「偏依善導」といい、その根拠を「三昧発得の聖者」と受けとられたこと、及び、善導大師が、中国の僻地・石壁山玄中寺に道綽禪師を訪ね、その人格を通して念仏の教えを受けられた求道のきびしさをわれわれは学ばねばならない。

玄中寺には、日本から寄贈された曇鸞、道綽、善導三祖師の絵像が祀

教化活動の場における

善導大師

元大正大学講師 金子真補

布教伝道に携わる者の学ぶべき大切な心掛けとして次の三点が考えられる。

(一) 大師の求道精神 大師の当時は末法思想の盛んな時で、大師は幼い頃より非常に求道的であった。伝記によると、経文を学問研究の対象とせず、釈尊の直説、修行の教示と見られ、目隠しをして経蔵に入り、「観経」を得て、悲喜交々嘆じて、この経こそ生死を超える経とされ、観経行者となり、遂に極楽世界を觀見され

られている。千仏閣には、曇鸞大師が承明元年（四七〇）に竣工したのが玄中寺であると刻した碑があり、大雄殿の前庭には、道綽禪師にかかわりのある「鉄弥勒像碑」があり、往時が偲ばれる。善導大師関係のものは、玄中寺にはなにもないようであるが、とに角、道綽、善導の両祖師が、この玄中寺で対面相承されたお姿を想像するとき、念仏の声と共に深い感動を覚えた。今こそ「山僧善導」の自己に対する厳しさと社会に対するたゆみぬ菩薩道の実践の芳躅を慕いたいと思う。

たとある。この文は深い求道精神と仏教の第一義を示したものと見得る。また「観仏三昧」を成就され、尚「観経」を味読するに、経末に出る釈尊の讃える「念仏の功德」に不審を抱き、その解明の為、天下の師を求め、遂に「石壁玄中寺」に道綽禪師を訪われた。広大な中国、土地は不便、而も千三百年昔のことで、全く命がけの旅であった。道綽禪師八十才、導師二十九才、その対面の光景もしのばれる。念仏の法門、まして「無量寿経」を頂き、心から拝読し、念仏こそ阿弥陀仏衆生済度の本願であると領解し、その著に示す「一心専念弥陀名号云」の立場となり、「寒冷にも汗を流す」念仏行に励まれ、遂に「念

仏三昧」を発得された。

(二) 自己省察 大師は自己を、浮ぶ頼のない罪惡生死の凡夫と見、「念々称名常懺悔」の生活をされた。伝記には「仏法東行未有禪師盛」「阿弥陀仏化身」と仰がれている事を思う時、念仏者の覚悟の程をよく知らされ、それでこそ「念々不捨者の念仏」となり得る事と己が身を深く反省される。

(三) 大師の布教伝道 道綽禪師のもとで厳しい自行を積まれたが、師は四年後亡くなられたので、導師は都長安に出て「自信教人信、難中転更難、大悲伝普化、真成報仏思」と言われ、非常な転向をされ、「三十余年別の寝所なく」、写経、マンダラ、特に有名な「二河白道の図」を画き、礼讃を行なうなど、今日の「視聽覚教育」の先駆とも見得る方法で布教伝道に大活躍された。その方法に教えられる。

大師当時の世情は、曇鸞道綽二大師の努力も空しく反対派の思想流れて、浄土の信仰全く地に落ち、大師の不惜身命の努力によって挽回されたと知る時、今日立派な伽藍に安座する事なく、求道、体験は弱くとも出来るだけ自行を励み、布教伝道に精進せねばならぬと考える。

(文責 金子)



教 区 夏 期 僧 堂 記 レポート

神奈川教区恒例の夏期僧堂が今年も七月二日から三日間、大本山光明寺を会場として開かれた。今回から神奈川浄青会員の正式な参加協力という事で、会員もその意気に燃え多数参集した。新進気鋭の青年もいれば、父兄と二役の指導員もいる。今年の僧堂生は昨年よりやや減って、五八名だが、我が青年会の次代を担う子供たちでもあるので、指導員

教化ポスター第二号解説

「照顧脚下」

神浄青では昨年に続き、教化ポスター第二号を作製しました。

作製にあたっては、くらしの中の仏教、ということで、仏教用語としてはポピュラーな「脚下を照顧せよ」を取り上げてみました。

この語は自己の足もとに注意せよ、これが転じて履き物を揃えよ、となった禅語であることから、禅宗の僧堂・東司(便所)などでよく見かける言葉です。この場合の表記ですが、覚明の「徹心録」など漢語体の書物に

の方もつい熱が入る。毎年のこととはいえ、子供たちにとっては大きな試練と成長の場でもあり、年令を越えた集団生活は学校では学べない貴重な何かを身につけるのだ。大きな期待と不安が開講式での皆の緊張した様子で伝わってくる。楽しい想い出を持ち帰って欲しいと祈りたい。さて待ちに待った水泳の時間、色とりどりのビキニを横目でにらんでわき目もふらず渚のシド・ウバット。準備体操と諸注意がすむや否や、指導員の心配をよそに無邪気にはしゃぎ回る子供たち。今年からは工夫した水泳帽のお蔭で一段と監視しやすくなったが、最後の人員点呼を終え

は当然ながらすべて「照顧脚下」で、一部でいわれるような「脚下照顧」ではありません。僧堂などの実例を見ると必ず漢語文そのままを記しています。当浄青のポスターも通例にしたがい、本教区会員三浦正英氏の筆を依頼作製したものです。

ポスター

履き物を必ずきちんと揃えましょう

——照顧脚下——

履き物を揃えて心爽やかに

——照顧脚下——

て指導員一同はっと一息つくのであった。

続いて夜の座談会。傍観者にとってはこれほど愉快なものはない。自己紹介の緊張と笑いの後、初のジャンケンポン・アッチムイテホイ大会である。代表が班の名誉をかけて大奮戦、熱い歓声の中、子供たちの囲りに大きな輪ができていく。

消灯後は言わずと知れた餓鬼騒動。



いよいよ鬼指導員の出番である。枕の弾丸の飛び交う中、本格的な餓鬼と指導員の戦いが始まるのであった。

指導員参加者

柴田会長、森、清水、塚田、菱科、小杉、戸田、野中、里見、戸松、鳥居、日比野、松蔭、塩沢、一、市川、篠田、北邨

(北邨記)

沖縄袋中國「青雲寮」

勸募活動について

全国浄土宗青年会主催の沖縄袋中國養護施設「青雲寮」建設資金勸募を神奈川教区青年会として組内の会員諸兄並びに関係諸大徳の皆様方をお願いしました所、絶大なる御支援をいただき、ここに厚く御礼申し上げます。

尚、左記に全国の勸募状況を一部御報告申し上げます。

一 福岡教区 浄青 一、三二七、七二七円
二 東京教区 浄青 一、三一五、八七九円
三 千葉教区 浄青 一、〇一八、五四八円
四 滋賀教区 浄青 九一六、八九五円
五 神奈川教区 浄青 八一三、六五七円
六 兵庫教区 浄青 五〇九、七五〇円
七 三河教区 浄青 五〇一、〇〇〇円
八 長野教区 浄青 四七九、三六二円
九 埼玉教区 浄青 四五一、一九〇円
一〇 静岡教区 浄青 三八七、二二三元

以下他二十五教区省略

全国勸募総額 一、二、五〇七、三六三円
尚、右勸募金は、去る八月二十九日清涼寺に於て開かれた、全浄青中央研修会の折、理事長より、袋中國の山本有綱園長に贈呈されました。

(事務局 森記)

組だより

京 浜 組

三月定例会は南区大光院宮林昭彦師より「法要・通夜における法話」と題して講話を願ひ、組合員の外港南、港北の会員もご参集願ひ盛会裡に終了することが出来た。

六月に入り総会を鶴見正行寺で開催し事業計画、同報告、予算案決算を協議した。定例会は①施餓鬼会法要について②陀羅尼について、と題して白石師より解説を受けた。八月定例会は川崎区一行寺において浄土宗教学大系を資料とし、「法名の意義」について会員相互で研鑽した。

会員消息

▼良忠寺森本祐康会員 次女彩子さん昭和五十三年二月十七日出産。
▼教安寺野呂幸忍会員 長男幸裕君昭和五十三年七月二十八日出産。

港 北 組

四月一日午前十時より第三部大善寺において第一回花まつり子供会を開催、近隣の子ども約四十名が参加し、音楽法要、フランクフルト、

歌等、楽しい集まりであった。

五月五日午後二時より港南組との対抗ソフトボール大会を開催、寺族を交えて和やかなうちに7対6で港南組の勝。会場を移して子供達が主役の懇親会を賑やかに行った。

五月十三日午後五時より第一部泉沢寺において総会を開催。併せて水谷哲雄、斎藤文宏両師を講師として研修を行う。宗規、一宗の諸手続、申請方法等の解説と質疑応答を行う。七月二日午後三時より第二部蓮勝寺において小学生以上の子弟を対象に、日常勤行・棚経の勉強会を行う。また、機関紙「港北浄青」第二号を九月一日に発行した。



港 南 組

港南浄青は本年度より本格的活動を展開している。四月二日総会を開き、本年度行事予定等を決定し、引き続き法儀司津田徳翁先生を講師に「法式講習会」を開講した。

全方位交流をめざす当組としては五月五日に港北浄青とのソフトボール大会と家族親睦会を行い成功裡に終了した。予想に反して高度な打撃と守備は応援団一同に深い感銘を与えた。大会終了後中華料理に舌鼓を打ちながらの、子供中心のパーティはまさに「子供の日」にふさわしいものであった。当日御臨席を賜った両組長も大変感激され、暖かい励ましの言葉を頂いた。

更に六月から鎌倉浄青会合同による法式講習会を開講した。津田先生を講師に毎月一回開講している。会員諸氏は法式の螢雪に精進している。この会の特色は原則として毎月一回開講すること、引き続き開かれる先生を囲んでの懇親会である。研修と親睦を計り大同団結し、互いに切磋して助け合う事が目的である。会員諸氏ご多忙と拝察するが、積極的参加を期待する。

尚、会員の動静として、四月二十二日光安寺長谷川善隆師と浄性院高島上人御息女みどりさんが、吉川執

事長御戒師御媒酌により成婚式を挙げられた。お若く美しい新婦、既婚者にとつて羨望の限りである。又同日専念寺伊藤彰哲師晋山式を厳修。喜びのあまり二、三名が酩酊(本当の喜びの酒である)求道教化に若い情熱を燃やすお二人の活躍を期待したい。四月三十日正応寺石川到覚夫妻に次男誕生。細身の体でよく頑張る。健やかなご成長をお祈り申し上げたい。

中 郡 組

今年度前期は、会員研修会だけでなく、組教化団と相互協力を話し合い、講習会等を共催で各々一回ずつ行った。会員も積極的に研鑽に励み意欲も大いに上ってきた。

今後とも会員独自の活動も一層充実を計ると共に、今後の講習会等は、教化団との協力を強化し、先輩諸大徳の参加を呼びかけ、会員との相互協力をより一層強力にし会の充実を計っていきたいと思っている。

後期は会主催「高座説教について」、組主催「念誦」の講習会を行い実践面の強化を計っていく。

新入会員 一真光君(西光寺)

大正大学2年生、中浄将来のエース。夏期僧堂に参加、大変よく協力してくれました。

三 浦 組

当初の計画どおり、毎月一回、講師に山崎弁阿上人を迎え法式講修を行なっている。毎月、全員参加を目標に法式の修得に頑張りたいと考えている。四月、村井寛信上人を講師にスライドを中心にビルマ仏教の実情についてお話しを聞いた。七月、総会を開き、昭和五十二年の事業報告と昭和五十三年度の予算及び事業計画について話し合いを行なった。また、この席に会長の柴田哲彦先生がご多用にもかかわらず出席され、盛大のうちに一層の親睦を深めることができた。

今後の計画として年末に商店街を中心に行脚姿の念仏行進を計画している。我々三浦組としては、浄青会の活動の一つである化他活動に今後、大いに力を注いでゆきたいと考えている。

高 座 組

大河内先生を懇請しての隔月実施の法式講習もこの十月で第五回を数え漸く軌道に乗りだした。浄土宗僧侶としての基本からマスターして貰うと云う先生の指導方針にもとづき未熟ながら熱心に習練している。

他の活動目的等会員相互の合議により少しずつ前進させようと期して

いる。

小 田 原 組

小田原浄青本年度計画は、今まで月二回の定例会を月一回に変更に、全員必ず出席して内容充実を計る事からはじめた。その為毎回十名前後の参加者を得て、当初の目的に近づきつつある。

その研修内容は、阿弥陀経読誦、割笏の打ち方、施餓鬼会の実習、又西念寺北村上人による善導大師についての法話等意義あるものになって居る。

他方小田原浄青記念、会員揃いの法衣の調製（これは会員以外でも多数支持を得た。）夏休みを利用して寺族をまじえての箱根強羅ホテルでの親睦会等充実した活動がつづいている。又個人的なことながら戸松君、小島君の結婚等、お祝いごとも多く皆多忙の中を頑張って目的に向って努力している。一步一步着実な歩みをして行きたいと念じている。

鎌 倉 組

当鎌倉組青年会としては、先輩諸上人の協力を得て、この春四月初総会・会則・役員等を規めて輝やかしいスタートとなった。

活動としては、港南組の企画した

法式講習会に便乗をし、津田法儀司を隔月に組へ招いて日常勤行式・執持法威儀部と作法の一通り勉強をしている。

次回よりいよいよ「法事讀」に入るので、ぜひこのチャンスにマスターしたいと思い、会員一同張切っている次第である。なお次回は、十一月十九日（日）三時半

久里浜 伝福寺

にて行ないます。会員外どなたでも奮って御参加下さいますようおすめします。

我々の会としては、まだまだ発足したばかりのよちよち歩きですが、これから盛んに会員の勧誘、相互のつながりと基礎造りに専念していきますので見守ってほしいと願っています。なお会員消息としては、第2部の天然寺、関谷儀郎会員が、七月に住職の晋山披露をしました。

■ 御 案 内 ■

第三回家族親睦会

別時会和パーティーの夕

恒例になった神奈川浄青家族親睦会を本年も左記により催しますの寺族の皆さまもお誘いのうえご参加下さいますようお知らせいたします。

日時 昭和五十三年十一月十八日（出）午後四時より

会場 座間宗仲寺及び座間キャンプ
催し物 かくし芸・子供の為のお話
等を計画中

当番組 小田原組
高座組

後 記

▼昨年十月に第一号創刊、今年早一年第三号目だ。あれをのせたい、これもと、盛りだくさん計画するが、書かねばならぬ肝心の青年会員の原稿がべ切日まで集まらぬ。先輩諸師の原稿は早々と送って下さる、誠に有難い。

▼今回、頁数も増え、内容も豊富になった。大正大学の諸先生方、又我々の大先輩の白幡師に原稿をお願い致しました。

▼さあ善導忌だ。さきの宿泊研修大会大成功！この豪華な講師陣。服部英淳先生、宮林昭彦先生、金子真補先生の名講義。これを土台に高祖善導大師の教えを大衆に教化させよう。

▼青年会はサロンのであってではない。まさにその通りだ、化他のため、なすべき仕事は山積されている。

▼スタッフに大正大学助手石川到覚師を迎えた。今後のご活躍を期待している。
(編集子)